

北村由美著

『インドネシア 創られゆく華人文化——民主化以降の表象をめぐって——』

明石書店 2014年 260ページ

つ だ こう し
津 田 浩 司

はじめに

本書は、スハルト新秩序体制崩壊後のインドネシアの民主化過程において、華人文化にまつわる表象がどのように形成されたかを幅広く分析するものである。周知のようにインドネシアは過去1世紀にわたって大きな政治・社会変動を経験してきたが、そのめまぐるしい変化の只中にあってもっとも翻弄されてきたのが華人たちであったといっても過言ではなからう。1998年5月にスハルト大統領が退陣して以来、それまで「同化政策」の名のもと中国や華人に関わるとされた要素を公の場から締め出してきた諸規制が相次いで撤廃されてきたが、本書はこの15年あまりの間に登場したいわゆる華人文化の表象を具体的に取り上げ、それらがどのような人々によってどのようなプロセスを経て表舞台に出てきたかを、当事者へのインタビューや関係資料を駆使しつつ詳細に検討している。

本書の構成は以下のとおりである。

序

- 第1章 インドネシアの国民文化の形成と華人
- 第2章 インドネシアにおける華人の歴史
- 第3章 言語——ジャカルタ言語景観にみられる中国語使用と変化のきざし——
- 第4章 宗教——儒教の再公認化と華人——
- 第5章 表象——華人文化表象の場としての印華文化公園——
- 第6章 華人文化表象のもうひとつの方向性——プラナカン概念の再浮上——

終 章

I 本書の内容

著者が大きく依拠する分析枠組みは、表象と実体という二項対立に基づくものである。その足場確保のためにまず著者は、第2章において実体としてのインドネシア華人史を、王廣武（Wang Gungwu）による中国人移民類型論に部分的に依拠しつつ提示する。そして以下の各章では、ポスト・スハルト期にインドネシア華人が自らの歴史をどのように捉えどの部分を切り取ったかを、この実体的歴史を参照点に検証するという方法を取っている（46ページ）。

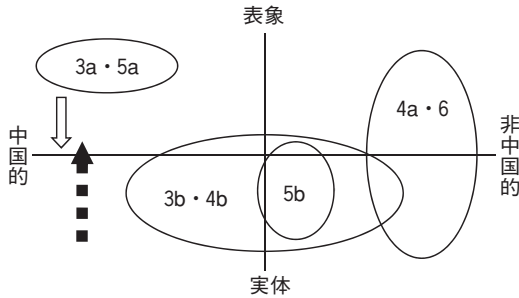
具体的事例を検討した第3章から第6章は、いずれも既出の論考を土台としている。また本書自体も2010年に一橋大学大学院言語社会研究科に提出された博士論文を基にしているのだが、その精度は構成においても論述においても格段に上がっており、この間に費やされた並々ならぬ労力が窺い知れる。

さて、先述の表象と実体という著者が用いる分析枠組みに沿って各章の位置づけを評者なりに大雑把に図示すると、図1のようになる。なおこの図中では論点整理のために、横軸として中国（本土）的と非中国的という対立項を便宜的に設定した。このうち後者の項には、土着的（ローカル）や普遍的（グローバル）など相対立する要素が同居しているが、無論著者はこれらについて正確に腑分けしていることを付言しておく。

視覚的な言語表出のあり方とその背景に着目する第3章では、まず、公的な場での漢字を含む中国的要素の表出規制が解かれたポスト・スハルト期の言語景観上の特徴として、外資系中華料理チェーン店や新設の中国語教室、観光地等ではいかにも中国的なデザインや漢字の看板が溢れている（3a）一方、古くからある華人商店は中国語の看板をほとんど掲げていない点を確認する。そのうえで、例外的に中医学（およびそれと一体的な存在である漢方薬局）の領域は、中国語の専門用語と医療知識が不可分であったために、それらが中国的要素の表象をめぐるポリティクスに巻き込まれることなく継承され、結果としてそれが今日中国語の看板としてそのまま表れていることを明らかにしている（3b）。

第4章では、スハルト期に非公認扱いとされてい

図1 本書各章の内容の布置関係



(出所) 筆者作成。

た儒教を再び公認化させるべくなされた働き掛けを取り上げている。著者によればこのプロセスは、当初より儒教の公的認知の是非をめぐってのみならず、華人に対する行政上の差別全般を問うために問題化されたこと、ただし運動の過程で当事者はそれをあえて「華人問題」としてではなく「信教の自由」や「人権問題」として提起することで、社会の広範な支持を得て最終的に国家からの認知に結びついた点を指摘している(4a)。一方で、こうして制度的に公認宗教となった儒教のあり方と、人々の間で受け継がれている伝統的な文化・信仰実践としての儒教(4b)との間には、いまだ一定の乖離があることを鋭く指摘している。

第5章は、スハルト期に国内各地方の文化を紹介する公的な場として位置づけられてきたテーマパーク「タマン・ミニ」の敷地内に、「印華文化公園」なる施設が造られるに至った経緯を詳述している。華人団体の働き掛けによりインドネシア華人の歴史や文化を紹介する目的で計画されたこの新施設には、当初は目玉として、19世紀後半に建てられて以来1世紀にわたり同国における華人の政治・社会活動の場として機能してきた中国様式の邸宅チャンドラ・ナヤ(5b)を、ジャカルタ中心部から移築する計画であった。しかし紆余曲折のすえ最終的に取りまとめられた計画では、チャンドラ・ナヤは複製が建てられるにとどまり、代わりに敷地中央には現代中国の政治・文化・歴史に関連づけられた紫禁城風の巨大建造物群が据えられることとなった(5a)。著者によれば、これは「華人性」の文化表象のあり方が当事者らの間でいまだ定式化されていないことを示しているという。そして、この第5章の

事例は第4章のそれと同様、表象の内容を普及、充実させたり厳密化を図るよりも、スハルト期に定式化、権威化された表象の方法にそのまま華人文化を参入させることで、国家からの形式的認知を得ることを優先させたとみるべきであろうとしている(198ページ)。

事例の最後を飾る第6章では、前章の印華文化公園の例に典型的なように、インドネシア華人の文化表象がいかに中国(ないしトック=新たに移民した華人)的なものに偏る傾向に対して、危機感を覚えた知識人たちが新たに編集して世に出したコピー・テーブル・ブック(豪華図録本)の表象内容に着目する。土着化した華人を指す「プラナカン」の語をタイトルに含み同概念を前面に押し出すこの図録本では、華人たちがインドネシアの地に根差すなかで独自に洗練化してきた家具、服飾、料理等のいわゆるハイ・カルチャーが、後世に継承されるべき精華として目録化されており、同時にまたそこには、インドネシアに根づくプラナカン華人の独自の文化がインドネシア文化の多様性に色を添える欠くべからず一員であるというメッセージも込められているという(6)。著者はこうした文化の提示のあり方の特徴を、プラナカンと類似の概念を提示する同時代の近隣国(マレーシアおよびフィリピン)の事例と比較しつつ、浮かび上がらせている。

II 実体とは何か

著者の敬服すべきフットワークの軽さとネットワークの広さによって得られた各章の綿密な記述は、変転著しいインドネシア社会のそのもっとも動態的な部分をリアルタイムで捉えた実証的研究として、今後大いに引用されるべきものである。評者もほぼ同時期にこのインドネシア華人という対象にアプローチしてきた「同業者」として、他人に自信をもって薦められる新たな定本が刊行されたことを心より嬉しく思う。しかし「同業者」だからこそ、そしてまた、著者が論述の過程でありがたくも評者の議論を援用してくれているからこそ(40~41, 167~168ページ)、この2人の間に根本的にあると思われる対象の捉え方の差異を際立たせることで、本書を位置づけてみたい。

既述のとおり、著者は認識論的に華人実在論に

立っている。そのこと自体を、エスニシティをめぐる古典的論争を引っ張り出しつつ非難するつもりはない。なぜならば、戦術的にそうした立脚点に立つことで、個別・限定的に多くの重要な知見（たとえばインドネシアにおける中医学の知的系譜（3b）等）を明らかにし得ているからである。しかし、そうした個別・限定的な文脈をひとたび離れ、各章を表象という括りで同一地平上に並べ、それに對置する形で表象母体としての実体＝華人を指定した途端に、議論全体のナイーブさが露呈する。というのも、著者も参照するアンダーソン（Benedict Anderson）の『想像の共同体』（のとくに増補された各章）を引くまでもなく、表象は単なる実体の自然な表出・反映ではなく、むしろそれによって実体を構成せしめるという広い意味での政治性にまつわる営みに他ならないからである。著者もこのことには十二分に気づいており、そのため「華人性」にまつわる主張が誰のどのような思惑をもとに発信されているかを主題化している。さらには、それら表象が必ずしも華人たちの側から一方的に発信されているわけではなく、国家や地方政府などさまざまなアクターの関与や人権などの概念と連接されるなかで形成されているという事実を見抜いている（42, 199 ページ）。

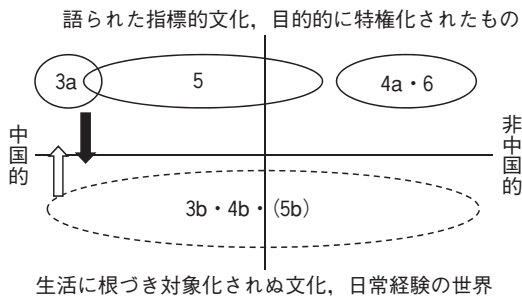
しかしこうしたダイナミズムは、こと華人社会内部の捉え方においては著しく減じられる。著者はインドネシア華人を、「自らの出自を中国系であると認識した上で、インドネシアを出身地と考えている人々」（33 ページ）と定義し確定することから始め、それを第2章の歴史記述によって一体的・固定的な民族集団として（アカデミックに）主体化している。もちろん著者は、華人と一口にいってもその内実がいかに多様であるかを幾度も強調する（8, 33 ページ）。しかしながら、現象として観察される文化表象（図1の上部）を取っ掛かりに、その当事者にインタビューをして表象のあり方や経緯を問いはするものの（図1の白矢印＝分析視角）、それら表象の根拠を最終的には実体的集団として定位された華人（図1の下部）へと求めようとする著者は（98, 134, 139, 166, 192～193 ページ）、論理的にある種のオートマティズム（図1の黒矢印）を招来してしまっている。それは極論すれば、そもそも諸条件さえ許せば民族は自然な発露として民族的要素を表

出するものであり、現実にはそれはさまざまな制約により変成・調整されることもあるが、民主化の進展に伴ってそうした制約も弱まるだろう、また民主化の結果実現される表象の多声性によって民族内部の多様性もまた確保されるだろう、という見立てである（その裏返しとして、第7章では民主化というものをも基本的に楽観的に捉えている）。著者が、「華人のインフォーマントの皆さんは（中略）、華人が真にインドネシア社会に受容されるようにという思いを強く持っている」（9 ページ）と愛情を込めて述べるとき、著者は彼女が対象とした「物言うインフォーマント」たちを個々の表象当事者である以前に「華人化」していると同時に、彼らを「物言わぬ華人大衆」の半ばストレートな代弁者として位置づけてもいるように思えてならない（実際のところ著者は、自身が実体とみなす領域については3bを除けばごく簡単に言及するのみで、ほとんどブラックボックス化している）。

先に触れたように著者は、評者がかつて分析に導入した視角、すなわち「アシン（asing）／アスリ（asli）」という相対立する概念枠組み〔津田 2011, 228-236〕を肯定的に引用する形で議論を進めようとしている。しかし評者はこの枠組みを、日常の対面関係を認識上の仮設的基点（図2の下部）としたうえで（その根拠は、実体として定義されるような華人には求められていない点に注意されたい）、その場から「華人性」として析出される現象（図2の上下の接点）を文脈に即して捉えようと試みる際に用いた（図2の白矢印＝分析視角）。そして、自らの日常の領域にあったものが、特定の目的のために特権的に切り出され価値づけられたうえで、自らに再び降りかかってくる（図2の黒矢印）瞬間に生じる違和（図中の上下の乖離、ないし上の言説が下の領野を定義づけようとする際に生じる齟齬）こそが、「アシン」の感覚を引き起こしていると分析した。その記述が成功しているかどうかは措くとして、今この観点から本書の各章の内容を再整理するならば、図2のようになるであろう。

この図においては、国内の華人全体の認知を求めつつ種々の活動を繰り広げている本書のインフォーマントたちの営みはすべて、あくまでも特定の目的のもとで表象を行っていると思われることになり（たとえば第2章で示されたような歴史記述もま

図2 本書各章の内容の位置づけ直し



(出所) 筆者作成。

た、特定の観点からの表象ということになる)、したがってそれら表象を、人々の生活領域と照らしてどれほど真実味があるかどうか(実体にどれだけ基づいているか否か)でもって判断しようとすることは、的外れであることに気づくだろう。むしろそこでは、表象当事者がどのような目的のもと何を動員・構成しようとし、またどこに向けて提示しようとしているかこそが問われることになる(図2の黒矢印)。他ならぬこの問いを解明することが本書の目的であると著者は冒頭で宣言しているのだが(7ページ)、だとすればなおさら、華人を所与の実体

的集団=表象母体として措定する議論構成は、表象それ自体のダイナミズムを捉え損ね、また分析上の布置関係を錯綜化させてしまうばかりか、何よりも著者の意図に大いに反して華人社会内部の声を単色化することにも繋がっているように思われるのである。

以上、本稿では著者と評者の方法論・認識論的立場を際立たせるために上記のような対比を導入して論じたが、本書がこうした対比では決して整理・還元し尽くされぬ多くの実証的知見を含みもっていることは言うまでもない。本稿のささやかな論点整理はあくまでも、インドネシア華人をめぐる研究が一層進展することを期しつつ、その豊かな記述の中に試みに入れた議論喚起のためのひと筋の切り口にすぎない。

文献リスト

津田浩司 2011. 『「華人性」の民族誌——体制転換期インドネシアの地方都市のフィールドから——』世界思想社。

(東京大学大学院総合文化研究科准教授)